黒い彼岸花

ハンペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い彼岸花

【Ｎコード】
Ｎ７８２０Ｎ

【作者名】
ハンペン

【あらすじ】
愛しい彼女を失った少年、彼女との思い出の場所である自然公園で自然には存在しない黒い彼岸花を見つける。黒い彼岸花は死者を蘇らせる事が出来るらしい噂を少年は鵜呑みにし縋る。

（前書き）

初めましての方ありがとう。オタク戦線を読んで下さった方もありがとう。
投稿２作品目になります。
最後まで読んで下さるととても嬉しく思います。

僕は無気力な日々を送る。あの子の幻影を追いかけて見つける為に生きて行く日々。
そんな時学校でこんな噂を耳にした。

「なぁなぁ最近流行ってるネットの噂あれこの学校の事らしいよ」
「マジで？！あの蘇るって奴だろ？」
「そうそうそれ、だけどあの噂嘘っぽくないか？」
「なんでそう思う？」
「だって黒い彼岸花ってあるのか？俺見た事ないぞ」
「ないからこそ噂になってるんだろ。それに黒い彼岸花はその人を心の底から思っている人の前に咲くらしいぞ」

僕は意識して聞いていた訳ではなかったがどうしても耳に残っている。それはやはりその噂が蘇るって話だったからだろう。僕は昔に常に想いを飛ばす。僕の目の前から唐突に消えてしまった。愛しい人。彼女がいるから僕がいて、彼女の為にこの人生を捧げると決めた人。
あの子の笑顔、泣き顔、怒った顔、拗ねた顔、全てが瞼の裏に浮かび上がり消えて行く。
無駄な事をしているとは分かっている彼女が死んでしまった事も頭では理解している。
でも、どうしても諦められなかった。医学書も読み漁った、怪しい魔術書も読んだ、藁をも掴む気持ちで宗教にも手を出した、だがそれらは全てが徒労に終わった。

僕は彼女といつも一緒に過ごしていた。自然公園に足を踏み入れた。自然公園の中心、そこは「想いの木」と呼ばれている大樹が雄々し

く枝葉を伸ばしている
その下には彼女との一番大事な思い出がある。
ふと、大樹の下から脳を蕩けさせる甘い芳香が漂ってきた。それは脳の神経を麻痺させてしまうような禁忌の香り。
その香りの発生源は大樹の根元、黒い花弁を燐光で輝かせた見た事もない彼岸花が咲き誇っていた。
僕はフラフラと夢遊病者の足取りで花の元まで歩いて行く。
花に近づけば近づいて行く程、香りは強くなりそれにつれて僕の中に残っていた意識にもより一層濃い霧に包まれていくような感覚。
だが、僕はそのこと自体に不安は覚えなかった、それよりももっともっとこの匂いを嗅いでいたいという欲求の方が強くなっていく。

僕は彼岸花の下の地面の掘り返し根っこごと家に持ち帰った。
家に持ち帰ってから僕はずっと花だけを見て、香りを嗅いでいた。
下から母さんが僕を呼ぶ声がしたけどそれも無視して無我夢中で見ていた。
不思議とお腹も空かなかったし、眠くもならなかった。

翌日、学校に行く時間になった。僕は花を鞄の中に入れて家を出た。
母さんの心配する声が聞こえた気がしたが無視した。
登校しているときも鞄の中から漂う彼岸花の匂いに心を奪われていた。授業中もそんな感じで過ごしたみたいだが記憶にない。

僕の意識が戻って来たのはすでに日付が変わろうとする五分前だった。
普段ならとっくに下校時間も過ぎて学校にはいないであろう時間だ

が僕はまだ教室の椅子に座っていた。
机の上には黒い彼岸花、変わらずあの蕩けるような香りを放っている。
が、驚いた事にその花弁だけは全て散っていた。根や茎などは変わらず瑞々しく潤いを湛えているのに花弁だけが全て散っていた。
枯れたわけではない。だが全ての花弁は散ってしまっている。
僕は心のどこかが欠けてしまったのか、その花弁に手を伸ばし胸の前で握りしめる。
花弁を握りしめる両手にさらに力を込め皮膚に爪が食い込むまで握りしめ、唇が裂けるほどに噛み締める。
次第に口の端から血が垂れ、手の方からも流れ始めた。
流れ始めた血は体を伝ってリノリウムの床に血溜まりを作っていく。
どのくらいそうしていただろうか、十秒、十分、一時間かもしれない、自分ではもう時間の感覚すら曖昧になってきている。

「何してるの？」

僕の上からそんな声がかけられた。
反射的に僕は顔を上げ目を見張った。
そこにいたのは彼女だった。他人の空似であるはずがない。僕が彼女を他人と見間違えるはずもない。
そこにいたのは紛れもない彼女だった。顔形、体のライン、仕草、声、全て寸分の狂いなくまさしく彼女を証明していた。

「何で君がここにいるの？」
「質問してるのは私の方よ」
「……」
「どうしたのかしら？呆けちゃって」

彼女はクスクスと笑う。その姿も昔と全く変わらない。
だがそれでも僕は聞かずにはいられない。

「本当に本当に君なのか？」
「あなたは何を持って私を私とするのかしら？」
「その言い方やっぱり君なんだね」
僕はようやく彼女が蘇った事を実感する。
「ずっと君に会いたかったんだ。君が死んでから僕の人生は無意味になった。だからこそ僕は君に……君にもう一度会ってそして……一緒に死にたかった」
「あら私はせっかく生き返ったのだからあなたと一緒に生きていたいけど。死んでもいい事なんて一つもないわよ。だから人は生きる事に必死になるのだから」
「君がそういうなら僕も一緒に生きていくよ。それが君の望みならば」
「ありがとう。なら私と永遠の誓いをしましょう。あの大樹の下と同じように」
彼女が僕に顔を近づける。その芳香はあの黒い彼岸花と同じ蕩ける様な匂い。
「さぁ誓いましょう、私はもうあなたの前から姿を消さない。あなたの傍を離れない」
「僕も誓う。僕は君を二度と離さない。君の隣にいる」

彼女の唇が僕のと重なる。
僕達は互いを貪り喰らうように口づけを交わした。
口づけを交わしている間、僕の意識は彼女と一つになった。そして彼女の意識とと混ざり合いそのまま、彼女の意識、僕の意識の境界はなくなり僕という一人の人格は消滅した。

翌日、僕の遺体が教室で見つかった。
あれだけ流した血液は跡すら残さず消え去っていた。
代わりに僕の周りには黒い彼岸花が咲き誇っていた。リノリウムの床に。
僕の死に顔は安らかにそして満足していた。

彼岸花その花言葉は……

？再会？

ＥＮＤ

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
これからも不定期ですが作品を上げて行くので読んで下さると嬉しいです。
感想もぜひお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7820n/

黒い彼岸花

2010年10月10日12時09分発行